

神社仏閣油まき事件と教会への提言

①K氏との出会い

「クリスチャンは愛し合わないといけません。殉教者の精神に戻り、愛し合わないといけません。『もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。』日本の教会は、福音派、聖霊派、いろいろな宗派があり、お互い喧嘩して悪口を言っていることも聞いています。愛し合って、一致する時、教会にたくさんの方が来ます。それがリバイバルです。」

神学校を卒業した年、奉仕が入っていたその日の礼拝は、外部からの日本人の講師であった。Kというその講師は、アメリカで TOP5 の腕を持つニューヨークの産婦人科のドクターだと自己紹介し、イエス・キリストがいかに関心し、奇蹟が働いて、医者となり患者を癒してきたかを語った。そして、「教会はこのままではいけません。クリスチャンはもっと愛し合わないといけません！」と語った。

これまでの信仰生活の中で、聖書の教えの主張の違いや人間関係の誤解が、人間の罪の性質に働き、たやすく分裂をもたらし、主が与えておられる一致が崩れ、教会が弱体化していく様子を見てきたため、リバイバルを妨げている一番の原因は、「愛と一致の欠如」だと私は思っていた。(ヨハネ 13:35、詩篇 133 篇)

「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。それは頭の上にそそがれたとうい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたる。それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。」

K氏は、インターコープという世界的宣教団体の国際理事をしていると言われ、グローバルな影響力がある人だという印象を持ったため、国際的な視野の意見を聞くために、頻繁ではなかったが、メールでの交流が始まった。

1年ほどが過ぎて、K氏からインターコープの本部に何か問題が発覚し、IMMJapan という mission 団体を立ち上げることにしたという連絡が入った。ちょうど勤めていた派遣職が満了となった時期であった。仕事が決まるまでのお手伝いという感覚で、事務奉仕を引き受けた。

K氏のメッセージの中では、神社に行つての霊の戦いや神の御声を聴く祈りの訓練についても語られていたが、キリストなる神は、離れたところからでもお言葉一つで奇蹟を起こすお方であり、なによりもキリスト自身が実際に土地の霊の戦いをなされたこと聖書には書かれていないことなので、私自身は、必要を感じず、神社や異教の霊などよりも、キリスト自身に目を留め続けたいと思っていた。またそれよりもむしろ、兄弟間に働く不和、不一致により、教会が輝けなくなるように働く内部の事柄のほうがよほど大きなことに思っていた。

神の御声を実際に聞くことについても、内なる御霊が心の内に働く御声と聖書のみことばを正しく聴きとり、主に向かう教えがなされていくなれば、すばらしいように思って委ねていたのである。

① IMMJapan で

IMMJapan の働きは、聖会を開き、ビジョンを伝えて賛同者を集め、「Back to Jerusalem」宣教のための宣教師を集めることであった。その目標に向かうために、日本のリバイバルに与えられている時間は限られていると、K氏は宣伝活動を促していた。宣伝効果が出て、教派を問わず大きな教団や小さな教団から家の教会、カトリックからも登録者が集まってきて、3か月後には、御声を聞く訓練が開始された。

もともと信仰を持っている者たちが、それぞれの信条を持って集まってきているわけで、中にはかつてカルトとして社会問題になったような団体の人が加わったこともあったが、K氏は「IMMには神の強い光があるので、古いものが変えられるか、耐えられなくなっていなくなるかになる。IMMは誰をも拒むことはしません。」と対応を取ることはしなかった。

IMMの聖会や招かれた教会で語られる内容は、毎回似たような証であった。集まってきた“働き手”に、宣伝用としてK氏が語ったメッセージのDVDを数十枚ずつ配られていたが、半年経っても、宣伝する内容は福音でもキリストでもなく、K氏自身であった。

このように IMMJapan と関係を持つことになったのだが、深入りをしないですむ機会がなかったわけではなかった。 IMMJapan が立ち上がった頃、K氏個人に関する事で、私生活についてのうわさを確認するようという助言を牧師から受けたのだが、うわさと本人の言い分に 180 度食い違いが見られた。K氏本人に確認したところでは、きっぱりと否定してそれなりの説明を受けたため、誰が流したかわからない悪いうわさを信じることはできず、嫉みや傷から、真実ではない中傷を流されるということも考えられたため、また、弱さや欠点は誰にでもあると、流れのままに委ねてしまったのであった。

そのような中、発足から 3 か月ほどすると、K氏が言う「神がこう言われた。」「こうなると言われた」と個人的に聞いている具体的な内容が実現していないことが、目立ち始めた。預言というものは長いスパンのものもあるので、注視するに留めていたが、はっきり実現しなかったものがある今となつては、それは神が言ったのではないというほかない。

申命記 18:20-22

『…ただし、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。』あなたが心の中で、「私たちは、主が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか。」と言うような場合は、預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。」

宣伝効果によって、IMMの影響は全国に及んでいたのも、問題となりそんな行為を見聞

きすると、行き過ぎることのないように事務局で注意を払っていたのだが、危ない団体と認識せざるを得ない確定的なことが起きた。2013年12月になって、一部 IMM メンバーの周囲の迷惑を顧みないやり方が目につき、起こっている迷惑行為を事務局として K 氏と日本の代表者に報告していた。なんとか治めないと教会の一致どころか、問題ある団体となってしまうと思つてのことであつたが、結果的にカルト化特有の現象が現れ、その後のやり取りで見たマインドコントロール「偽りの神の声にコントロールされる危険」を感じ、私個人がどうこうして治まる問題ではないことを確認し離れた。

② IMMJapan 脱退後

離れた後、導かれるままに関係者たちを通じ検証していった結果、驚く程の偽りがだんだんと明らかになっていった。上手な詐欺師は自分をも騙すと聞くが、まるで詐欺被害にあつたような心境であつた。

IMM から離れた後は、その性質上、社会的な問題が起こることが予測されたため、私自身、団体に名前を置いていた責任を感じ、機会が与えられる度に、危険性を警告していたが、霊の戦い、使徒、預言を強調するような教えの中にいる人などには、何が悪いのか理解されないこともあり、中には「良いものを悪く言うのは欺瞞の罪だ」と断罪の言葉が聞かれることもあつた。それでは、悪いことを良いようにいうのは、何と云えばよいのだろうかと思いつつも、気付く時が来ること願ひ、神に委ねた。(伝道者 7:13)

「神のみわざに目を留めよ。神が曲げたものをだれがまっすぐにできようか。」

③ 事件をふり返って

神社仏閣油撒き事件が発覚した後、IMM から離れた人もいるが、ここに至つても霊の戦いに勝利したことへの攻撃による迫害だという言い分を信じる人たちもいる。殉教の精神が口先だけではなく、また、油を蒔いた行為が、真実の神の愛から出た行為であるとしたら、明るみになった今こそ、証のチャンスではないか。

日本人が培って大事にはぐくんできた文化への思いを踏みにじるならば、日本人の福音を聞く耳が閉ざされてしまつていく。パウロが「この務めがそしられないために、どんなことにも人につまずきを与えないようにと、あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦している」(Ⅱコリント 6:3) と言っていることを思い出してほしい。

「私たちは、この務めがそしられないために、どんなことにも人につまずきを与えないようにと…」

④ God God 詐欺に遭わないために

現在、キリスト教会の不祥事を聞くことが多くなり、カルト化被害の相談も増えてきている。選民をも惑わそうとする主の敵は、聖書の知識も知つていて、神のように見せかける奇蹟も起こし、占いのように的を得ている予言もできる。息子を語るオレオレ詐欺ならぬ、神の名を語る“God God 詐欺”である。

主の敵と本当の神の違いは、根本にキリストの愛があるかどうかであるのだと私は思う。神は愛である。愛なる神は、弱い者の言葉に耳を傾け、不義を訴える者を押さえつけることはなさらず、平和の和解を成し遂げてくださるお方である。

「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。」と十戒にあるが、“**God God 詐欺**”は聖書の時代から歴史を通じて起こっているといえる。その手段と手口を学ぶことは、被害の予防につながることである。

キリスト者間の真実の愛・平和・一致を祈ります。

主にありまして 櫻井 寿子